

『暗夜行路』「第一」を読む

——「結論」への疑い・「答へる事」の限界——

清 水 康 次

一 阪口に対する「結論」

『暗夜行路』「第二」の冒頭は、阪口なる人物に対する主人公時任謙作の「不快」から書き始められ、それが極点に高まり、「結論に達した」と表現されている。

時任謙作の阪口に対する段々に積もつて行つた不快も阪口の今度の小説で到頭結論に達したと思ふと、彼は腹立たしい中にも清々しい気持になつた。そして彼は其読み終つた雑誌を枕元へ置くのも穢らはしいやうな心持で、夜着の裾の方へ抛つて、電気を消した。

「結論に達した」という思いには、さらに「腹立たしい中にも清々しい気持」が加わり、それがいかにも到達点であることが強調される。そこで疑問なのは、なぜ作者はこの小説を「結論に達した」ところから書き始めたのかということである。それは通常、小説の終わる場所ではないのか。結論に達するまでのプロセスを、作者は第一章において説明することになるが、そこに長い時間の遡行があるわけではない。とすれば、この小説は、結論に至る小説ではなく、結論を疑う小説ではないのかという仮説が想定される。

冒頭の「結論」は、第一章の進行につれて次第に揺らいでくる。まず、「翌日」^{あくるひ}、竜岡と阪口の来訪を受けたとき、「清々しい気持」はすでになく、「今日阪口に会ふと云ふ事が未だはつきりしない彼の頭では甚く^{ひどく}こんぐらかつた問題であつた」と表現される。「結論に達した」ことを表明する機会であるはずなのに、それは「こんぐらかつた問題」に後退し、謙作は「阪口だけ断つて下さい」と、決裂を避ける方向に向かうとする。

然しそれにしても何故今日訪ねて来たか。其雑誌が出てからもう一週間になる。其間何か自分から烈しい抗議の手紙でも来さうに思ひながら、中々来ない。其不安に却つて脅迫されて出て来たのではないかしら。それとももつと性の悪い偽悪者根性から、太々しい面構へを自分に見せるつもりで来たのかも知れないと謙作は疑つた。若しかしたら手つ取り早く、面と向かつて思ひ切り云つてやつてもいいと考へた。

謙作の考へは段々誇張されて行つた。彼は顔を洗ひながらこんな考へで興奮した。

阪口への不快感は高まつていくが、「結論」の出た後の爽快さは蘇らない。解放されたはずの阪口の問題に、謙作は再び囚われ、拘泥していく。

二人に対面した謙作は、阪口が「不安」や「偽悪者根性」に駆られてやつてきたわけではなく、竜岡に連れ出されて来たことを知り、「想像」ははずれる。そして、竜岡が、謙作の前で、阪口への怒りを爆発させてしまうことで、「興奮」もはぐらかされてしまう。

謙作は先刻^{さつぎ}から阪口に対する自分の態度を如何^{どう}決めていいかわからないで居る内に竜岡がこんな風にやつて了つたので、その白けた一座をどうしていいかわからなかつた。其儘三人は黙つて居た。

謙作は竜岡の「迷惑」を想像する。「竜岡はさうする事で一方阪口を懲し、他方で、二人の間を多少でも気まづくなくして日本を去りたいと思つて居るのではあるまいか」。竜岡は二人の緩衝地帯になり、謙作をかばい、決裂を防ぐために気を配ってくれたのではないかと、彼は考える。ここには、〈庇護〉ないし〈庇護者〉のモチーフがある。この作品には、主人

公謙作をへ庇護する人物が数多く登場する。母、お栄、竜岡、信行、石本、愛子の母。しかし、へ庇護者たちは次第に謙作から遠ざかっていく。また、信行と愛子の母は、結果的に謙作を裏切ることへ庇護者ではなくなる。「第二」において、謙作はすべてのへ庇護を失って孤立するのだが、それはまだ先の展開である。

竜岡というへ庇護者の存在によって、謙作はますます「結論」から離れていく。謙作が直接阪口に向かい、自分の思いを告げていれば、いいすぎるにせよいい足りないにせよ、「結論」の幾分かは現実化される。しかし、竜岡の庇護によって、決裂は回避されて、「結論」はまったく顕在化しないままに終わってしまう。

第二章、謙作の家を出た三人はそれぞれに不快感を抱えつつ、容易に別れられない。最初、「氣不味い感情を脱け出せず」にゐる阪口は直ぐ二人と別れたがつたが、竜岡は却々彼を離さうとしなかつた。竜岡は酔って「吉原見物に行きたい」と言い出し、三人を動かしていくが、吉原の「女達」の叫び声に「すつかり圧倒されて」、「俺達はもう帰るよ。一緒に帰るかい？ それとも別れるかい？」と阪口に言うことになる。竜岡に引きずられてついでにきた阪口は、雨宿りに入った西緑では、逆に「物馴れた調子」で二人を芸者遊びに引き込んでいくことになる。緩い結びつきで漂う三人の動きを、最初は竜岡が作り、次に阪口が作る。竜岡は能動から受動へ、阪口は受動から能動へと形を変えるが、謙作は終始心の中に「拘泥」を抱えつつ、受動的に引きずられていく。阪口と竜岡の来訪に始まる動きを謙作は受動的に受け入れ、その動きの中で謙作は「日頃の気分」を奪われていくことになる。⁽¹⁾

さて、この「不愉快」な夜の中で、阪口は不快感の対象として見られ続けるが、謙作の感情は冒頭の「結論」からは後退したままである。

彼は先刻軍師拳の遊びを始めた時から自分の武骨な手に拘泥^{こだは}つて居た。或る不調和な感じが、それに平気にならう、ならうと思ひながら却々退かなかつた。それを今、阪口が露骨に指摘した。勿論彼は指摘された事でも不愉快を感じたが、それよりも、そんな事で自分に不愉快を与へようとした阪口の低級な底意に尚腹を立てた。

不快感は持続しているが、その一半は「吉原」という場所や西緑の「不調和な生々しい座敷の様子」や登喜子たちとの交渉に由来するものであり、すべてが阪口に向かうものではない。謙作には、むしろ阪口を冷静に見続ける眼が存在し、「彼は何かしら苛々しながら肉体からも精神からも来る凋残な気持に自身を浸し尽くして、却つてだらしく絶えず饒舌しゃべつて居た」と、阪口を捉えてもいる。そして、「こんなにしてゐる自分達が甚く醜く不愉快に感ぜられた」と、「自分達」を一まとまりのものとして捉える視線も存在している。阪口への不快感は、これ以上に高まっていくことはない。

第七章において、不愉快な夜から一週間ほどの後、謙作の阪口に対する感情は大きく揺れ動く。謙作は、信行から、山口という信行の中学の同級生であった「雑誌記者」が謙作の小説を雑誌に「出したい」という相談を持ちかけてきたと聞かされる。

「どうしてだらう？」

「何でも初め竜岡に勧められたらしい。それから山口は阪口の所へ行つて訊いたらいいんだ。すると阪口も切りにお前の物を讀めて居たと云ふんだがネ」

「うん」謙作は変な気がした。「何時阪口に会つたのかしら？」

「昨日の話で昨晚ゆうべとか云つてたよ」

信行の話が事実だとすれば、あの夜から数日後に、阪口は雑誌の編集者に対して謙作の作品を褒めていたことになる。阪口は、一体自分に対してどのような感情を持っているのか。阪口の小説に「猜いやり方」や「変な得意」を感じて腹を立て、不快を感じたことは自分だけの空回りにすぎなかったのか。謙作は阪口の真意がわからなくなり、自分の感じた不快感に自信が持てなくなってくる。

並行して次のようなエピソードも書き込まれていた。第四章において、「不愉快だった二三日前の夜」を振り返って、謙作は竜岡と次のような会話を交わしていた。

「不愉快は不愉快だったよ」

「どうして」

「阪口の調子が厭だつたぢや、ないか」

「阪口の此頃は何時だつてあたらう」

謙作は黙つて居た。

あの夜、謙作は阪口の挙動に不快を感じたが、竜岡はそれを感じなかった。竜岡がそれを感じなかったことに、謙作は不審を抱く。しかし、数日後、今度は登喜子の挙動を通して、緒方と謙作との間に同じようなことが起こる。トランプで負けた登喜子は「口惜しがつて何か云」い、緒方は「虐待」と感じて、「自分だけ勝負から抜けて了」う。登喜子と緒方の間に生じた「可成りに変なひつかかり方をした事から」について、同席していた謙作は「氣にも留め」なかった。第七章、謙作はその事実にあきつく。

彼は一週間前、同じ場所で阪口に不愉快を感じた。それを竜岡が殆ど気づかずにゐた事を不思議に思つたが、今自身が其位置に置かれて見て、案外さう云ふ事には気づかない場合もあるものだと考へた。——それにしろ阪口が山口に自分のものを推讃したといふのが若し本統なら、それは如何いふ気持からだらうと彼は今更に迷つた。

阪口に対する不快感は相対化される。そして、「迷」いはますます色濃くなつていく。

この第七章の文章以後、阪口は、第十一章の謙作の夢の中に現れる以外には作品に登場しない。阪口をめぐるプロットは、「結論」から「迷」いへという道すじをたどつて、それ以上につきつめられることなく、他の多くのプロットの中に消えていくのである。

「結論」に始まる第一章においては、阪口の小説や彼の「やり方」に対して、謙作の理解や不快感が前面に押し出されていた。竜岡もおおむねそれを支持し、阪口に対する別の評価は提示されていなかった。しかし、例えば「段々誇張され

て行つた」不快感に対して、「自分だけが鯨張^{しやちこば}つて居るやうな変な気がした」、「自分が狐^{きつね}につままれたやうに馬鹿気でも見えた」という表現があつたように、不快感に対する謙作自身の疑いも存在してはいた。激しい不快感が心を占めていたとき、潜在していた不快感への疑いは、「結論」が後退する中で次第に顕在化してくる。そして、信行の語る「阪口も切りにお前の物を讃めて居た」という伝聞は、疑いに大きな重さを加え、「結論」だけではなく、阪口に対する理解そのものに修正を迫ってくる。

作者は、謙作の内面に即して表現を展開し、謙作の感覚によつて受けとめられた、主観的な印象や思いを前面に押し出して描いていたが、同時に、それがひとりよがりな空回りではないかという疑いも描いていた。その疑いに根拠が与えられることで、両者の軽重は逆転する。⁽²⁾ 謙作は、主観的な印象や思いをただ頑迷に主張し続ける人物として描かれているのではなく、むしろ印象や思いに固執しつつそれを疑う人物として描かれている。一旦出した「結論」を盲信することではなく、それを疑い迷うことが、阪口との関係を通して示される謙作の人物像であると考えられる。

この疑いの高まりの上に、第一章に書かれていた次の文章をもう一度呼び戻せば、なぜ阪口への不快感が生じたのかという理由が浮かび上がってくることになる。

今の謙作は阪口に対しては極端に邪推深くなつてゐた。前に彼を信じて居ただけに、それを裏切られた今は、事々にかう云ふ邪推が浮ぶのであつた。殊に愛子との事以来、それは甚だ面白くない傾向だと知りつつも、彼は妙に他人^{ひと}が信じられなくなつた。

謙作の中には、「信じて居た」阪口に「裏切られた」という意識が強くわだかまっており、それが阪口への「邪推」に結びつく。そして、「今の謙作」の裏切られたという意識や邪推深い傾向の起点には「愛子との事」がある——。「愛子との事」が原因になり、誰も信じられなくなった謙作が、阪口にも不当な不快感を持つようになったという、もう一つの説明の文脈が潜在している。それが事実であるとすれば、事實は謙作の「結論」や激しい不快感と遠く隔たっていたことにな

る。しかし、この説明は事実を明らかにしたものだろうか。

極点にまで高まった阪口に対する不快感は、「邪推」ではなかったかという迷いに萎えていく。登喜子とのかかわりの中に現れる、「自分が一人角力に力瘤を入れ過ぎただけの事だと思つた」という急激な退行は、阪口とのかかわりにおいても同様に認められる。そして、阪口をめぐる不快感も、登喜子に対する好意の萎縮も、「愛子との事」から来る結果であるとする説明が、いわば第二の「結論」として出現してくることになる。

二 「愛子との事」にかかわる認識

第四章において、「あの不愉快だつた二三日前の夜」の登喜子の様子を思い出して、謙作は「不思議な悩ましさ」を覚える。あの不愉快な夜には、阪口への不快感というマイナスの感情と、登喜子への好意というプラスの感情とが、並列的に強く存在していた。そして、阪口への不快感が極点には至らないように、登喜子への感情も「深入して行かずには居られない程の気持」にはならない。あの不愉快な夜は、感情が動揺するだけで「結論」には届かない、カオスのような夜であつた。謙作は、登喜子に対して、このまま「気持を凋まして了ふ」のは惜しいと思う。しかし、現実にはならない。

二度目に登喜子と会つたとき、謙作は、「毒にも薬にもならない事を座を白らけさせまいと努力しながら互に饒舌つて居る」姿に、われながらあきれる。「全体これが、三日も前からあれ程に拘泥し、あれ程に力瘤を入れて来た事と何う云ふ関係があるのだらうと云ふ気がした」。登喜子への好意は、それ以上に高まつてはいかない。謙作は、「一人角力」という自覚を反芻する。

第五章において、登喜子への感情の停滞を語る文章に続いて、「愛子との事」が語り始められる。

勿論、此の変化は一つは登喜子の態度で導かれたものである。が、それよりも彼は愛子との事で、かう云ふ事には変に自信がなくなつて居た。そして、この自信なさ^が、知らずく此落着^{おちつき}に彼を満足させようとして居るらしかった。或る彼はもつと突き進みたがつて居る。然し他の彼がそれを怖れた。愛子との事で受けた彼の傷手はそれ程に未だ、彼には生々しかった。

登喜子への好意が高まつていかな原因として、「愛子との事」が持ち出される。そのことから受けた「傷手」が、「突き進」むことをためらわせ、「自信なさ」を作りだし、「此落着に彼を満足させようとして居るらしかった」と表現される。そこに捉えられている因果関係は、謙作の現状についての一つの認識を形成してくる。

「愛子との事」において、「一番こたへたのは愛子の母の気持であつた」。謙作が信頼していた愛子の母は、愛子へのプロポーズに対して「ドギマギした様子」を見せ、「変に冷たい」反応しか示さなかつた。

日頃其好意を信じ切つて居ただけに、此結果になると、其好意とは全体如何云ふものだつたかが彼には全く解らなくなつた。断られるまでも何か好意らしいものを見せられたら彼はまだ満足出来た。所が、それらしいものも全^{まる}で見せられずに彼は突き放された。彼は不思議な気がした。

存在すると信じていた信頼関係に向かつて一步を踏み出した謙作は、そこに信頼関係がなかつたことを知る。「それは失恋よりも、人生に対する或る失望を強ひられる点でこたへた」。謙作は、「一人泥田へ落込んだやうな此不愉快」を感じる。人を信じて一步を踏み出したことが誤りだったのか。進めば必ず、他人のいやな、見たくない素顔を見てしまうのではないか——。謙作の心に、「人の心は信じられないものだ」と云ふ、俗悪な不愉快な考^がが根を下ろし、突き進むことを「怖れ」る「彼」を棲み付かせてしまったというのである。

これは一時の心の病氣だ、彼はさう考へようとした。が、それにしろ、新たに同じやうな失望を重ねさうな事には不知^{いか}知、用心深くなつてゐた。寧ろ臆病になつて居た。

そして登喜子との事が既にそれであつた。彼は自分に盛上がつて来た感情を殺す事を恐れながら、扱て近づかうとして、それが最初の気持には全で徹しない或る落着きへ来ると、それでも尚、突き進まうと云ふ気には如何してもなれなかつた。其処で彼の感情も一緒に或る程度に萎びて了ふ。

「愛子との事」の後遺症が、登喜子への好意の高まりを妨げ、彼を突き進めなくしているという説明は、一見もつとも聞こえる。阪口とのこと、登喜子とのことがそれぞれにうまくいかない原因としてこの「傷手」があり、他人に対する不信感が「今の謙作」のすべてを規制している――。そのような自己認識に、謙作自身が一旦は到達する。しかし、この認識は、作品の進行とともに疑われ、却けられることになる。

第七章において、謙作は次のように自覚する。

彼は今も猶登喜子を好きながら、それが熱情となつて少しも燃え立たない自分の心を悲しんだ。愛子との事が自分がかうしたと云ひたい氣もした。然し実は愛子に対する氣持が既にかうであつた事を思ふと、彼は変に淋しい氣持になつた。

登喜子への好意が「熱情となつて少しも燃え立たない」のは、「愛子との事」に原因があるのではなく、「愛子に対する氣持」がそもそも「熱情となつて少しも燃え立たない」ものであつた。突き進むことを支えるほどの強い愛情は、「愛子との事」においても存在していなかつた。第一に、謙作の内面の「熱情」の欠如すなわち空虚は、「愛子との事」以前からの彼のあり方であつた。第二に、空虚を抱えながら、なお突き進みたいと思うあり方も同様であつた。他人に対する不信感より前に、既に謙作の内部に突き進めない理由がある。「愛子との事」は問題の起点ではなく、通過点にすぎない。謙作の感情や主観的な思いを乗り越えて現れる、「愛子との事」以来という自己認識も、不十分なものとして却けられる。そのことで、ようやく謙作のあり方そのものが問題として顕在化してくる。

第五章に、次のような文章があつた。

誰からも本統に愛されて居ると云ふ信念を持てない謙作は、僅な記憶をたどつて、矢張り亡き母を慕つて居た。(中略) 彼の愛されると云ふ経験では勿論お栄からのそれもなくはない。又兄の信行の兄らしい愛情もなくはない。然しそれらとは全く度合の異つた、本統の愛情は何と云つても母より他では経験しなかつた。

謙作は、「誰からも本統に愛されて居ると云ふ信念を持てない」でいた。母以外に「本統の愛情」を経験していないと考えていた。そして、彼は、愛子の母に「亡き母の面影」を見ていた。従つて、愛子への結婚の申し込みは、「亡き母」の「本統の愛情」につながる場所に、愛情を夢想してなされたものと考えられる。愛子への好意がやがて「本統の愛情」になることを期待し、「亡き母」に近い場所でその夢想を育もうとしたと考えられる。突き進むことを支える感情が存在しないとき、謙作は、それを未来に向かつて夢想し、その夢想を支えとして突き進むうとしてしている。しかし、夢想を支えとして以上、「不安」は免れず、挫折の可能性は高い。

謙作は自分の申出が万々一にも不成功に終る事はないと信じて居たが、それでも何か知れぬ不安が、逆も六ヶしさうに私語く事もあつた。然し彼は此不安を謂はれないものと考へてゐた。自分の臆病からだと思つてゐた。

明確な疑問や批判ではないが、「何か知れぬ不安」が心を去らなかつたと述べられている。もし「信じて居た」ことが實際的な裏付けのあることなら、「不安」は単なる「臆病」である。逆に、もし「信じて居た」ことが現実から懸け離れた夢まぼろしなら、「不安」は実は正当な疑問であり、挫折の予感となるものである。重要なのは、「不安」の正体がどちらなのか謙作には見極めきれないことである。いいかえれば、その夢想が、現実的な目標なのか、荒唐無稽な夢まぼろしなのか、見極めきれないことである。明らかな感情に支えられて行動するのではなく、あいまいな夢想に支えられて行動すること、あるいは夢想によって作り出される感情に支えられて行動すること——、その夢想家としてのあり方が、「第一」における謙作という人物の核心であると考えられる。だからこそ、彼は自分を疑い、迷い、突き進むことができない。愛子へのプロポーズに対して思わしい反応が返ってこないとき、信行が現れて「お前はどうしても愛子さんでなければ、

いけないのか？」と問う。謙作は「それは、さうぢやない」と答える。「お前がどうしても、と云ふ場合」には、「兎に角やる所まではやつて見る」が、「お前の愛子さんに対する氣持が其処まで突きつめて居ないのなら、念ひ断る方が俺はいいと思つて居る」と信行は言い、謙作は「念ひ断らう」と答えている。燃え立つような感情の裏打ちがあつて突き進んだにもかかわらず、「人の心」に妨げられて、事が成就しなかつたわけではない。だとすれば、事の成就を真に妨げたのは、他の中にある、いやな、見たくない素顔なのか、それとも、自分自身の中にある、空虚さや地に足の着かない夢想なのか。「愛子との事」において、謙作は、それを見極められる地点まで突き進みはしなかつたのである。そのとき謙作が突き進んでいれば、あるいは祖父の子という出生の秘密にも直面していたかもしれない。そして、それすら打ち破れたかもしれない。阪口との対決が回避されて、阪口の真意が見えないままに終わったように、愛子や愛子の母の真意をつきとめるところまで、謙作は突き進むことはできなかった。「信じられない」のは「人の心」なのか、自分の心なのか。謙作が問うべき問いは残つたままであり、彼はどこへもたどり着けなかつた。

そして、登喜子に対しても、謙作は、愛情を期待し、夢想する。

彼は登喜子が多少でも意味のある握方をする事を恐れた。望みながら恐れた。これは矛盾だつた。然し、それが彼の神経で、又行為の上の趣味でもあつた。其癖彼は猶且何かで登喜子の好意の証^{あかし}が見たかつた。

愛されているという「証」を求めることが、この場合、現実的なことであるのか、それとも荒唐無稽なことなのかを、謙作は見極められない。愛子への好意が結婚によつて「本統の愛情」になる可能性が否定できないように、登喜子への好意も次第に高まつていくことはありうる。しかし、登喜子との二度目の対面において、謙作は「一人角力」を自覺させられ、夢想は現実にはならない。謙作は、それを「一番あり得べき自然な結果だつたと思ひ直し」つつ、「今はそれで満足するより仕方がない。それ以上を望むのは間違ひだ」と反省する。それでも「今は」という反省なのである。謙作は、「それ以上を望む」、つまり二人が急速に激しく愛し合う關係になるという夢想を、未来の可能性としてはまだ捨て去つたわけ

ではない。それほどに、謙作は、恋愛関係を夢想し、期待している。

登喜子の場合にも、愛子の場合と同様に、「熱情となつて少しも燃え立たない自分の心」という空虚を謙作は抱える。それでも突き進みたいという思いも同じである。そして、その隔たりはいつか埋められると彼は夢想する。この夢想家としての謙作のあり方が、さまざまの問題を作り出したのである。

愛情というものにかかわって、第三章に、謙作が石本の勧める縁談を拒む場面があつた。「若い二人の恋愛が何時までも続くと考へるのは一本の蠟燭が生涯^{とほ}点つて居ると考へるやうなものだ」という石本の考へに對して、一方で「懷疑的になつてゐる現在の彼」は「悪くない響き」を覚えながらも、彼は「実母の両親の關係」を思い出して反論する。

二人は愛し合つて結婚した。そして終生愛し合つた。「成程最初の蠟燭は或る時に燃え尽されるかも知れない。然し其前に二人の間には第二の蠟燭が準備される。第三、第四、第五、前のが尽きる前に後々と次がれて行くのだ。愛し方は變化して行つても互に愛し合ふ氣持は變らない。蠟燭は變つても、その火は常燈明のやうに続いて行く」此考は彼に氣に入つた。そして、母方の祖父母は實際それだつたに違ひないと考へた。

夢想は、それが現実離れした絵空事と見極められれば、すぐにでも破棄されるだろう。しかし、謙作の生きる周辺に、「変らない」愛情が存在し、「亡き母」の「本統の愛情」が信じられている。夢想が現実的な可能性を持つ以上、彼は迷い続けるしかない。

謙作は、確信できる感情を持たない。そして、現実的な目標なのか、夢まぼろしなのかが見極められない夢想を抱く。彼は、「本統の愛情」を持つていない、と同時に、「本統の愛情」がありうると信じて、また、それが明日にも始まるかもしれないと期待して、求め続ける夢想家である。⁽³⁾ 愛子の場合にも、登喜子の場合にも、阪口の場合にも、そう思うこととそうあることとの關係が謙作には見定めきれないのである。そして、それらのことに對して答を提示するようなへ神の視点も、ここには存在していない。

三 「日記」の中の夢想家

この夢想家としての謙作のあり方を、より広い像において提示しているのは、第九章の「日記」の記事である。

日暮れ前に点ばされた軒燈の灯といふ心持だ。青い擦硝子の中に橙色にぼんやりと光つてゐる灯が幾ら焦心^{あせ}つた所でどうする事も出来ない。(中略) 自分には何物をも焼き尽くさうと云ふ欲望がある。これはどうすればよいか。狭い擦硝子の函の中にぼんやりと点ばされてゐる日暮れ前の灯りには其欲望はどうすればよいか。嵐来い。そして擦硝子を打破つて呉れ。

「何物をも焼き尽くさうと云ふ欲望」と、「狭い擦硝子の函の中にぼんやりと点ばされてゐる日暮れ前の灯り」との、大きな隔たりが表される。確信できる実体としては、閉ざされた、ちっぽけな「灯り」にすぎないにもかかわらず、果てしもない「欲望」を課せられているという極端なアンバランス。持ちきれないほどの巨大な「欲望」と、卑小な自分の現状とをどうつなげていけばよいのか。現状を顧みれば、「欲望」を断念することが賢明である。しかし、それを知りつつ、彼は、「欲望」を何とか実現しようとして「焦心^{あせ}」る。現状としての自己の無力や空虚の自覚と、大きな欲望を実現しようとする思いと、その間を何とかつなこうとする焦りとが、夢想家の要件であると思ふことができる。

大きな欲望については、次のようにも記される。

或る処で諦める事で平安を得たくない。諦めず、捨てず、何時までも追求し、其上で本統の平安と満足とを得たい。

本統に不死の仕事を仕た人には死はない。(中略) 彼等が人類の間に落して行つたものの確かさは彼等にどう云ふ運命が来ようとも決して動揺する事のない平安と満足とを与へてゐるに相違ない。自分はさういふ平安と満足とを望む。嘗て人の見た事のないものを見、嘗て人の聴いた事のない音を聴き、嘗て人の感じた事のないものを感じる。

欲望といつても、具体的な目標や獲得の対象があるのではない。従つて、欲望の実現について、段階的な実践的なプロ

セスを構想することは不可能である。ただ、遠い未来において何かを獲得し、どこかへたどり着く人間として自分を位置づけようとする意志だけは顕著である。彼は、遠い到達へ向かつての途上にある存在として、現在の自分を位置づけたいのである。それができれば、空虚という現状も耐えうるものになる。

焦りについては、目標と現状との距離を計測して生まれたものではなく、むしろ突き進むことを促す、内的な衝動のようなものといえる。「日記」の後に、次のような文章が付け加えられている。

実際、彼には今の人間が総て何かはつきりしない目的の為に焦りぬいてゐるやうに思はれた。何か知れない大きい意志に追ひ立てられてゐる。芸術でも宗教でも科学でも総てにこれが種々いろくな形で現はれてゐる。さう思はれた。彼は現在の自身に就いてもさう感じられた。謂はれなく苛々と焦り立つ時に彼は何かさういふものに追ひ立てられるのを感じた。

この焦りがどこから来るものなのか。それは謙作にもわからないものとして記されている。

そして、空虚と欲望と焦りとは、次のような夢想を形作る。

総ての生物が段々に死に絶えて行く。そして総てが氷の下に入つて了ふ。此考へは誇張でも何でも無い。此儘で行けば当然これが人類其他総ての生物の恐ろしい運命だ。然し人類は——此苛々と、殆ど無目的に発達しようと焦つてゐる人類はさういふ運命を素直に受け入れるだらうか。(中略)地球のコンデイションが未だ人類に悪くなる前、それ迄に人類は出来るかぎりの発達を遂げようとしてゐる。そしてそれで、与へられた運命に反抗し、それから人類を救はうとしてゐる。

人類の滅亡という運命への「反抗」——。それは、一概に荒唐無稽とはいきれない夢想であるが、さりとて現実的ともいいがたい。この夢想によつて、彼の現状は途上のものとして位置づけられる。しかし、途上にあるとはいつても、彼自身はもちろん、子や孫の目さえ届かない、はるかな到達点へ向かつての途上なのである。それが果たして自己の位置

づけといえるだろうか。彼の現状としての空虚と巨大な欲望とは、この遠い夢想の中でつながることができる。それほど隔たり・アンバランスを彼は抱えているのである。

この夢想は、「第四」に至って、却けられることになる。

嘗つてさういふ人間の無制限な欲望を讃美した彼の気持は何時かは滅亡すべき運命を持った此地球から殉死させずに人類を救出すくひださうといふ無意識的な意志であると考へてゐた。当時の彼の眼には見るもの聞くもの総てがさう云ふ無意識的な人間の意志の現はれとしか感ぜられなかつた。男といふ男、総てその為め焦つてゐるとしか思へなかつた。そして第一に彼自身、その仕事に対する執着から苛立ち焦る自分の気持をさう解するより他はなかつたのである。

然るに今、彼はそれが全く變つて居た。

本多秋五氏は、この變化を「自我意識の鎮靜、青年の自我中心主義の消滅」と捉え、また「宇宙における自我の位置づけの變化」とも捉えている。⁽⁴⁾この「第四」の問題の多い文章をどのように読むべきかについては、いずれ考えたいと思うが、私は、以上に見てきた夢想家としての謙作のあり方がどのように變化したのかという視点でそれを考えたい。「第二」において謙作の中にあつた空虚と欲望と焦りとがどのように變つていくかが、この文章を理解する鍵であると考ええる。

「第二」の謙作は、空虚と欲望との極端なアンバランスを抱えて「何でも彼でも、發達しようと焦りぬいてゐる」。そして、「自分は自分達の仕事を積み上げて行く、人類の永生、これだけではどうしてもあつて呉れなければ困る」と記されているように、苦しいたたかいの彼方に、たどり着くべき何か、絶對的な目的地が欲しいのである。彼は、自身を、どこかにたどり着くべき存在として位置づけたい。そこに夢想が生まれる。目的地を夢想し、自分が途上にあると夢想する。愛子に対するプロポーズも、登喜子に対する「拘泥」も、そのような彼のあり方から生まれたものであつた。

四 「答へる事の出来る問ひ」

自分が途上にあると夢想することは、非在のものを求めることであり、現状に終始することを拒むことである。その謙作に対して、もう一人の謙作がいる。それは、現状を受け入れ、あるがままのものに動かされる謙作である。「第一」の展開は、いわばゾルレンからザインへと大きく重心を移していくことになる。

第六章、三度目に登喜子に会ったとき、謙作は、「今はもう登喜子との関係に何のイリュージョンも作つては居なかつた」。登喜子への好意は続いているものの、それが「本統の愛情」や燃え立つような恋愛感情になるかもしれないという夢想は消え去ろうとしていた。登喜子に対する好意は、電車の中で見かけた、赤児を抱いた若い女や、清賓亭のお加代に拡散していく。

お加代に初めて会った日、「物馴れない謙作は余り口を利かなかつた」。ただ、お加代やお鈴の様子を傍観しているだけであつた。しかし、第七章において、緒方から、お加代が「一寸でもいいから君を呼んで呉れ」と言っていたと聞かされて、彼は動揺する。

謙作は顔を赤くした。お加代が如何云ふ気持でそんな事を云つたか？ それとも誰にも時々さう云ふ調子を見せるのか？ さう云ふ事が彼にはさつぱり見当がつかかなかつた。（中略）第一今の自分の手には余る女と云ふ感じから、興味は持てたが、それ以上には何とも考へてゐなかつた。其上に、お加代にとつての其日の自身を思ふと、プラスでもマイナスでもない只路傍の人に過ぎなかつたと思ひ込んでただけに今緒方からそれを聴くと変に甘い気持が胸を往来し始めた。

登喜子と初めて会ったときのような「不思議な悩ましさ」があつたわけではなく、後に「拘泥」や「一人角力」の夢想が残っていたわけでもない。にもかかわらず、緒方の一言に謙作は動揺する。この動揺は、先のような夢想とは異なる場

所に生まれている。「今までそれ程思はなかつた清賓亭のお加代の事が切りに想はれ」る。

登喜子と云ひ、電車で見たと若い細君と云ひ、今日の千代子と云ひ、彼は近頃殆ど会ふ女毎に惹きつけられて居る。そして今は中でも、そんな事を云つたと云ふお加代に惹きつけられて居る。

「全体、自分は何を要求して居るのだらう？」

かう思はず思つて、彼ははつとした。これは自分でも答へる事のいやな、然し答へる事の出来る問ひだつたからである。

そこに、「答へる事の出来る問ひ」の答へとして、彼の中にある性欲の「要求」が顕在化してくる。

先に見てきたように、第七章は、阪口に対する不快感が揺らぐ章であり、登喜子に対する好意が行きづまり、「愛子との事」の位置づけも修正される章である。激しい不快感が萎え、熱情となることを期待した好意も退行し、みずからの現状のあやふやさや卑小さに謙作は直面する。そのとき、「答へる事のいやな、然し答へる事の出来る問ひ」が現れてくる。非在の恋愛への夢想から、存在する欲求としての性欲へ、作品は重心を移動していく。登喜子からお加代への関心の移動は、その転換点に位置している。表面的には、同じような芸者遊びに見えながら、謙作の相手に対する接し方は大きく変化していく。⁽⁵⁾

第八章、二度目のお加代との対面において、「お加代の椅子に手をかけてゐた謙作の指が背中であまれた」とき、彼は「指を抜いて了」う。そして、そのことを「後悔」する。

謙作には女からさう云ふ遣方で交渉される事は余り気持よくなかつた。それで不愛想に指を引き抜いて了つたが、矢張り一方ではそれを後悔してゐた。こんな事に変な潔癖を見せつけたやうな自分も氣に食はなかつたし、一つの機会を見すゝに逃した事も惜しかつた。皆が酔つてゐる中で自分だけが酔はずにゐるからだと思つた。そして氣まぐれな心持で、

「その酒を呉れないか」と一度断つたペッパーマイントを注がして、それを一ト息に飲んだ。

「軍師拳の遊び」で、登喜子の指の「握方」に「好意の証」を探そうとして、「他の人の場合では、感じない鋭敏さを以つて、其握方の強さを」計ったときと較べれば、「二つの機会を見すく」に逃した事も惜しかった」という感想の安易さは明らかである。恋愛への夢想到に代わって、謙作は、目の前にある遊びに積極的に加わろうとしている。酔うことを求め、内なる「要求」のままに遊びに熱中していく。

謙作は今度は故意に、それに応じて、同じやうに首肯いて見せたが、それが自分ながら一寸調子のはづれて居た。気が差してゐると、今まで黙つてゐた宮本が、

「仲のええ事」と京都訛りを真似て冷やかした。謙作には妙に皮肉に響いた。彼はそれに抵抗しようとした。すると尚調子のはづれて来た。彼は椅子をずらし、お加代の方へ身を寄せながら、

「僕は君が好きなんだ」と云つて了つた。

自分の「調子のはづれて」と見ると見る眼は存在している。謙作は、欲求のままに遊びにのめりこむことが自分にふさわしいと思つてゐるわけではない。しかし、次には、彼は「お加代の首へ腕を巻いて、顔を寄せて接吻する真似をし」、「意識の鈍るやうな快感を感じ」る。彼は、結局、欲求のままに進み、「快感」に陶醉する。

さらに、第十章の「不良少年」の事件をはさんで、第十一章において、謙作は放蕩を始める。

幾つ目かの小さい橋を渡つて右へ折れると直ぐ、泥堀をへだててさういふ家々が見えた。彼は今更に到頭来たと思つた。登喜子のゐる場所へ行く時とは目的が異ふだけに彼の気持はぎこちなかつた。寧ろ非常に不愉快だつた。それでゐながら、中止しようと思ふ気にはならなかつた。

「登喜子のゐる場所へ行く時」は夢を抱いていた。今は、あるがままの欲求を満たすためだけに向かつていく。その行為に、彼は「不愉快」を感じる。にもかかわらず、「中止しようと思ふ気にはならなかつた」。そうして、「彼の放蕩は少

しづつ烈しくなつて」いく。彼は「変にお栄を意識しだし」、「悪い精神の跳梁」に引きずられる。「淫蕩な悪い精神が内で傍若無人に働き、追ひ退けてもく階下^{した}に寝てゐるお栄の姿が意識へ割り込んで来る」ようになる。湧き起る性欲に囚われて、「身体」は放蕩の深みへ墮ち、「頭が濁つて来る」。

「答へる事の出来る問ひ」に対する性欲という答へは、今までの阪口に対する「結論」や「愛子との事」にかかわる認識と較べた場合、疑いもなく存在するものを指しており、揺らぐことはない。愛子や登喜子に対して求めていた愛情という夢想と較べた場合にも、現に謙作の中に存在する力であり、謙作を否応なく動かしていく。それでは、夢想家であることをやめ、確実な力の「要求」に従ったとき、謙作はどこかにたどり着けたのかというと、それは否である。放蕩を重ねながら、謙作の気持ち少しも「放蕩者らしく」ならず、「放蕩しながら常に不愉快がついて廻る。謙作の思いのすべてが「放蕩者」というあり方に合致していけるのなら、それは到達といえるだろうが、放蕩によつて満たされるのは彼の内部の一部分にすぎない。満たされずに残る思いの方が大きいのである。「不愉快」「自己嫌悪」が蓄積し、傍若無人に振る舞う「悪い精神」のために、謙作は混乱を深めるだけである。結局、性欲の「要求」に従うことは、彼にとっては自分を見失うことにしかつながらない。

「或夜」、謙作は夢を見る。彼は、自分を動かすものの小ささ、「安つぽ」さを見る。

それは七八歳の子供位の大きさで、頭だけが大きく、胴から下がつぽんだやうに小さくなつた、恐しいよりは寧ろ滑稽な感じのする魔物だつた。それが全く声もなし、音もなしに、一人安つぽく跳つてゐる。(中略)彼はこれが跳つてゐる間、其棟の下にゐる者は悪い淫蕩な精神に苦しめられるのだと思つた。淫蕩な精神の本体がこんなにも安つぽいものだと思ふ事は却つて何となく彼を清々しい気持ちにした。そして今度は本統に眼を覚ました。

夢の中で、性欲という「悪い淫蕩な精神」は、彼の外からやつてくるものと位置づけられる。その「安つぽ」さは、彼の思いと釣り合うものではなく、それに支配されているとしても、逆らうことができないとしても、なお「淫蕩な精神」

は彼の思いを代表するものとはなりえない。夢に助けられて生まれる自覚が、彼を「清々しい気持」にさせ、性欲の問題はひとまず片付くことになる。

どこかへ到達しなければいけない、いつかは獲得しなければならないという思いは、今の自分の現状の空虚さを痛感させる。途上の存在として自分を位置づけても、焦りはつのりこそすれ治まることはない。しかし、かといって、今あるものだけを見、「答へる事の出来る問ひ」に答えることは、自分をいたずらに卑小な存在にするだけである。性欲という自分を確実に動かす力も、自分の本質とは認めがたい。結局、すべてが、本当の自分をつかむことには至らないのである。

「第二」において、謙作はいくつかの答えらしきものに近づく。阪口に対する「結論」、「愛子との事」にかかわる認識、そして、性欲という「答へる事の出来る」答え。しかし、そのいずれもが確かな答えではない。揺れ動きながらも、謙作はまだどこへもたどり着いていない。これはまだ、長い行路の始まりなのである。

第十二章、謙作は、すべてが行きづまったことを自覚し、それを打開しようとして、「純粹に一人になるために旅立とうとする。『暗夜行路』「第二」は、信行と謙作の次のような会話を描きながら閉じられていく。

「腹は立つよ。然しそんな事をしたつて、結果が何にもならないと分つてゐれば怒る気もしなくなる」

「さうかな。それはその方が本統かも知れないが、僕なら中々それでは落ちつけないな」

「然し追求すれば、するだけ不愉快になりさうだからね」

「それが分つてゐても、初から赦す気にはなれない」

「結果が何にもならないと分つてゐ」ても、「追求すれば、するだけ不愉快になりさうだ」なんて思っている、進めるところまで進まなければ「落ちつけない」のが、謙作のあり方である。どこまで行けば本当に落ち着けるのか。謙作の問いかけを確認して、「第二」は終わる。

注

(1) ここには、〈突然の不幸の来訪〉と〈受動性〉のモチーフがあり、謙作は〈来訪するもの〉を受け入れざるを得ず、そのことで「日頃の気分」という安定を失っていくと捉えておきたい。このモチーフについては、拙文『『暗夜行路』のモチーフについて』（『志賀直哉全集 月報』第十七号、岩波書店、二〇〇〇年八月）で触れたが、さらに別の稿を留意して見ていきたい。

(2) 石原千秋「反転する感性——『暗夜行路』論——」（『日本近代文学』第三十九集、一九八八・一〇）に、『暗夜行路』の語りについての考察があり、「これらの語りは、『序詞』Ⅱ〈枠〉を正確にフォローする機能と、それを相対化する機能との二つの相反する機能を同時に果たしている」という指摘がある。「読者は、〈枠〉を踏まえよ、しかしそれを信じてはならない、という二通りのサインを送られ」という見方は首肯できるが、それが結末での「ダブル・バインド」の解消に至るといふ捉え方は、やはり「単線的」すぎるように思う。作者は、読者に「二通りのサイン」を送るだけではなく、謙作の内部に「二通り」の対立を持ち込み、謙作の中で迷いや葛藤を描いていると見ておきたい。なお、下岡友加「『暗夜行路』論——自我との相剋、時任謙作の闘いが意味するもの——」（『広島女子大文学』第十四号、一九九七・九）も、謙作と阪口の関係について点検し、「不快が、実は彼の一人よがりな感情によって無限に拡大させられている可能性をも多分に含んでいる事が、本文の記述に明らかなのである」と述べ、このような二重構造に言及している。

(3) 『和解』（一九一七（大正六）一〇）において、書こうとしながら完成できなかった小説として、「夢想家」（あるいは「空想家」と題する小説が登場する。つまり、「夢想家」（「空想家」）は、「原『暗夜行路』に一度は付けられた題であった」（生井知子「志賀直哉論——原『暗夜行路』をめぐる——」（『国語と国文学』第六十五卷第二号、一九八八・二）。私も『和解』を論じる文脈で、この「夢想家」に触れたことがある（『和解』の構成）（『女子大文学』

国文篇』第三十九号、一九八八・三。草稿との関係については改めて考えたいが、そのようなキーワードとして「夢想家」を想定している。

(4) 本多秋五「直哉——『暗夜行路』序説」(岩波講座『文学』十『表現の方法 七——研究と批評 下』岩波書店、一九七六・一〇)。本多氏には別の発言もあるが、とりあえずここでは、この文章を挙げておきたい。

(5) 山口幸祐「『暗夜行路・前篇第二』の世界——謙作と阪口(または、冒頭と末尾)——」(『日本文学』第四十一卷第九号、一九九二・九)において、既に、登喜子とお加代を「対照的な存在」と見る捉え方が提出されている。その点において、また、第七章を境に「謙作の意識は変化している」と捉える点において、私の論は山口氏の論と重なる部分がある。ただし、「謙作が阪口と同等の人物になった」と見る、山口氏の論の主要部分については、私の見方は異なっている。

なお、『暗夜行路』の本文の引用は、『志賀直哉全集』第四卷(岩波書店、一九九九・三)収録の本文に従った。